
夢の中

はりがねん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の中

【コード】

N0108Z

【作者名】

はりがねん

【あらすじ】

連載小説としていますが、思いつきのネタの集まりです。掘り下げる程でもないものや、なんとなく思いついたものを集めています。当然、なんの脈絡もない内容です。一応物語形式ですが、それぞれ独立している上、夢の中なので何でもアリ。それでも良い方はぜひ。

始まり

ゆっくりと目を開き、のっそりと身体を起こす。しばらくぼーつと壁を見つめ、携帯電話に手を伸ばして時間を確認した。

12/3 Sat AM 8:47

しばらく眺め、まだ早いなと思い直してそのままベッドに横たわった。冬用の厚い布団へと潜り込み、そのまま目を瞑って何も考えずに寝転がる。

何も考えずに暗闇の中にいる事は幸せだった。

何も考えなくても良いという事が、とても好きだ。特に何かを考える事が苦手な私にとっては幸せな事である。

私はそのまま夢の中へとまどろんだ。

「また来たの？」

暗闇の中に洒落た机と椅子が白く浮かび上がる。椅子に腰かけたその人は、手に持ったティーカップを机の上に置く。面倒臭そうに立ち上がると頭を掻いた。

「いや、別に来たらいけないって訳じゃないけど……よっぽど起きるのが嫌なんだね」

名前の知らないその人はワイシャツにジーパンという、かなりラフな恰好だ。私の普段の恰好と良く似ている。洒落っ気が無い所が特に。

「それで、今度は何が希望なのかな」

私は漠然と想像を膨らませる。彼には私の考えている事が何故か全とお見通しなのだ。別にその事に嫌悪を覚える事はなく、どこか

でそれが当然のように感じていた。

私の想像を受け取った彼は苦笑を浮かべる。

「ほんと、そういうの好きなんだねえ」
いけないかな。

もっとも、仮にいけないと言われても私にやめるつもりはなかった。

「知ってるよ。別に好きにすれば良いさ。ここは君の夢の中なんだからさ」

私の心の中を覗ける人は誰もいない。私が夢の中でどんな世界を漂おうと、それに誰かが干渉など出来る筈もない。

「そうだね」

彼はぐるりと人が一人入れそうな円を描く。出来あがった円の向こう側には暗闇ではなく、別の景色が見えていた。

「さあ、準備は出来たよ。それでは 良い夢を」

File 1 三等賞

「大当たり〜！」

店員が大きな声を張り上げるのと共に、その手に持つベルをけたましく鳴り響かせる。周囲にいた買い物客たちが何事か、ところちらの方に視線を向けた。

私はビンゴマシーンから手を離し、店員に冷めた視線を向ける。小さな穴から吐き出された玉は黄色だった。それが何等を示しているのかはさっぱり見当もつかないが、このような状況になるのであれば、ハズレの方がいくらかマシだっただろう。

店員が私の様子に気づいた様子はなく、大きな声のまま喋り続ける。「おめでとございます！ 三等賞です」

たかが三等賞でこの盛り上がり。一等をとっていたら、と思うとぞつとする。

そんな事を考えていると、店員が後ろにある段ボールから何かを取り出した。

「三等賞の商品は魔獣です！」

「は？」

私は反射的に聞き返していた。

当然だろう。そんな物、欲しくもない。

「いりま……」

「あ、ちなみに返品は不可ですので」

景品を辞退しようとする、店員に先手を打たれた。

(へ……返品不可の当たりくじなんて、いらねえっ！)

思わず顔が引き攣るのを感じるが、店員がその事に気付いた様子はない。店員はそんな私の手に何かを押しつける。私は受け取りたくはなかったが、半強制的に受け取らされた。

手に持った魔獣とやらを見てみると

「……柴犬？」

そこには見紛う事なく、柴犬がいた。

(これのどこが魔獣なんだ……)

柴犬を顔の目の前まで持ち上げて全身を舐めるように観察していると、店員の自慢気な声が聞こえてくる。

「驚くことなかれ！ その魔獣、見た目は柴犬で可憐な姿をしているが、それは世を忍ぶ仮の姿！」

柴犬如きでここまで格好つける奴もそうはいまい。語り口が異様なため鬱陶しさを感じるが、それは表情に出さず心の内に留めた。

「なんと、裏返すと……豹になるのです！」

小型犬である柴犬が、どうやったら大型の肉食動物である豹になれるのか。そもそも、イヌ科ですらなくなっている。せめて狼とかならば、まだ分かるのに。

いや、問題はそこではなかった。

(裏返すって……なに?)

胡乱な視線を店員に投げていると、店員は私から柴犬を奪い取り、口を思い切り開かせていく。通常は赤色であるはずの口内が、この柴犬は黄緑色をしている。その事が不気味だった。

店員はなんの躊躇いもなく、柴犬を文字通りひっくり返した。その様はリバーシブルのぬいぐるみのようなようだ。

(……これ、本当に生き物なのか)

どこにでもいる普通の柴犬が、あっという間に黄緑色をした豹へと変わってしまった。大きさも柴犬の時に比べると倍ほどになっている。

店員は一仕事終えた、とばかりに額の汗をぬぐう。

「いかがですか！ これが三等の景品である魔獣です！ かつこいいでしょう。すごいでしょー！」

黄緑色の豹は私の足元にやって来ると、その足にすり寄ってきた。私は思わずその頭を撫でる。

「つきましてはこの魔獣、人とまったく同じ食品を食べるので、普通の豹と比べてエサ代は困りません」

豹に対する知識はないので、それが本当かどうかは怪しい所である。

「いかがです？　かわいいでしょう。おまけに柴犬の姿にもなれるので、場所もとりません！」

「いや、いいません」

店員の笑顔が凍りつく。足元の豹も身体を私の足にすり寄せたまま硬直している。

「私の家、ペット禁止ですから」

File 2 監視者

十字路の中空に居座るようにそれはいた。

姿は大型の鳥　いわゆる鷹とか鷲に姿が近く、それよりも遙かに巨大であると近寄らなくても分かる。それほどまでに、その鳥の大きさは異常であった。それに加えて黄金に輝く身体。実際に光りを発している訳ではないので眩しくは無いが、その光景は見る者に神々しさを感じさせる。

事実、その鳥は人々を神の如く監視するかのように周囲を睥睨していた。目が合った人々は何もしていかないにも関わらず、怯えてしまふ。それほどまでに眼光は鋭く、自分たちは裁かれる側　食べられる側である事を認識した。

ある日、ある子どもが鳥に尋ねる。

「なぜ、あなたはそこにいるのですか」

鳥は答えない。

ただ、鳥はそこにあり続けた。

*

12/3 sat PM 1:42

「寝過ぎた……」

私は携帯の液晶画面を見て、急いで出かける準備を始める。寝巻きを脱いで手早く服に着替え、髪にくしを通してひとつに束ねた。

「あ、ご飯ご飯」

朝と昼が一緒になってしまったので、いつもよりも多めの食事をとる。テレビを点け、いつもと番組が違う事に気がついた。すぐ脇にあるカレンダーを眺める。

「……土曜日だったあ！」

私はその日、一度寝ならぬ二度寝をした。

File 3 階級について

「貴族とか身分がなくて良かった」

手元の本から顔を上げ、机の反対側にいる友人を見つめた。友人はニコニコと微笑みを浮かべている。同じ年とは思えないほど、無邪気な笑みだった。

「何でそう思うの？」

どこかぶっきらぼうで、不機嫌そうに聞こえる言葉はわざとではない。しかし多くの人は眉をひそめてしまう。そのため、避けられる事が多いのだが、この友人は気にしなかった。敬遠する事なく、変わらず傍にいてくれる。

この友人は数少ない理解者でもあるのだ。

「ん？ だってさ、身分がないから好きな事が出来るんだよ。好きな物だって食べれるし、好きな場所に住むことが出来る。これって幸せな事だよな」

ニコニコニコニコ。

どこまでも気楽な思考の持ち主だ。逆に羨ましく思える。なるうとは思わないし、なれないけど。

「何でそう思うわけ？」

意地が悪いと思いつつも、言わずにはいられなかった。肘をつき、キョトンとしている友人を見つめたまま続ける。

「そうだね。確かに貴族とか、いわゆる特権階級はなくなったよ？ だけどね、それはあくまで表向きの話。平民こいちから見れば、身分による差別はない。だけど、そんなに簡単な問題じゃないと思うな」

友人は理解出来ていないのか、不思議そうに首をかしげている。

本当に、そんな単純な話ではないのだ。元々数の多かった平民はただ気持ちを変えるだけで身分はほとんどなくなる。力の弱い貴族にしてもそうだ。チャンスとばかりに新しい事に手を広げていく。駄目なら平民と同じように落ちるだけ。

しかし、身分の高い貴族はどうだろう。特権という名の味をしめた人々が、そう簡単に身分を棄てるとは思えない。

推測の域でしかないが、身分による階級はまだ残っているのではないか。

そもそも、平民という下の立場からでは、上を仰ぎ見る事しか出来ない。そんな不安定な姿勢からでは全貌を見る事など出来ないだろう。いわば、蚊帳の外にいる状態だ。そんな状態で、真実を判断できるはずもない。

だから、この考えはあくまで推測だ。だが、ただ考えているだけでは何も考えてないのと同じ。つまり、結局

「ふうん？　なんかよく分かんないけど、難しいんだね」

自分も深く考えてない友人と同じという事だ。

「そうだね」

*

目を開き、一気に上半身を起こす。目を擦りながら、私は大きく溜息をついた。

「……ずいぶんと生真面目な奴だな」

先程、夢の中に現れた人物の事である。その人と同化していた私は、彼だか彼女だかは知らないが少々苛立ちを覚えた。

私の同化した人物は、理論だけで満足する類の人間のように思えた。夢の中で同化した感触からして、頭は良いかもしれないが行動は伴わないタイプと判断する。理解はしているが、理解していない振りをする類の人間。分かっているつもりでも、自発的に行動しようとは思わない人間。

（ああいうタイプ、嫌いなんだよね）

朝から少し憂鬱だ。

（賢い頭をもっと有効活用しろっての）

そして、その賢い頭を分けてくれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0108z/>

夢の中

2011年12月11日19時46分発行